

## 小さな案内人

### 新しい世界をひらく

雨あがりの午後のこと、あたたかな陽ざしのなかを、ひよこ色のセーターを着た一歳の息子と出かけた。息子はいま、よちよち歩きをはじめたばかりの人間初心者である。

とつぜん彼が道ばたにしゃがみこんだ。何かに見とれている。私もつられて彼の隣にしゃがんで、いったい何があるのかとのぞきこんだ。道ばたにはむき出しの排水溝があって、そこを流れる水に、子どもは一心に見入っているのだった。わずかにくだるゆるい坂道に沿ったコンクリートの細く浅い水路に、きらめく幾何学模様を描いて、澄んだ水が勢いよく流れていた。粗い舗装のきめが作る砂利の凹凸が規則正しい水の菱形模様を生み、陽をあびて光りながらどこまでも続いていく。それは思いもかけない美しい世界だった。私は驚いた。毎日急いで通りすぎていたなじみの道とありふれた風景。そのなかに、小さな雑草の列にかくれて、水が絶えまなく描きだすこんな光景が広がっていたとは。たまたま小さな子どもにつられてのぞきこむことがなかったら、決して気づくこ

とのなかった視界だ。大人になった人間にとって、道はただ歩き過ぎるための場所なのだから。もし大人が道ばたにひとりしゃがんで溝をのぞきこんだりしていたら、どうしたの、気分が悪いのですかと、通りかかった人にたずねられてしまうだろう。

子どものいるところ、こんなふうに予期しない新しさが、大人にひらかれることがある。遠い世界へ旅に出ずとも、そんな新しさが日常のなかにわいてくるのは、なんという贅沢だろうか。

まだ人生をはじめたばかりの子どもにとっては、毎日が新しさの連続だ。だから子どもの目はたいいてい、大きく丸くひらかれている。大人は子どもを抱き上げ遠くを見せ、鏡をのぞかせ笑わせなどしては、子どもが生まれてきたこの世の中を見せる。しかし大人が子どもにするのとおなじように、子どももまた大人の世界を揺るがせ、広げ、おどろかせ、楽しませるのだ。文字どおり、おたがいさまに。さきに記した場面は、その事実に基づいた私の原体験である。

この話はじつのところ、いまから三十年以上も前のことである。私はいま、すでに六十歳をとくにすぎた老年。あるときひよこ色の小さなセーターに包まれていた息子はすでに三十代となり、二年あとに生まれた弟も同世代にあって、二人ともとうに生家

をはなれている。ずいぶん長く生きてきたものだ。それにしては、子どもたちと暮らしていたころのたくさんの場面は、あたかも昨日のことのようである。しかし記憶については、子どもとおたがいさまとはいえないだろう。子どもの方は親との場面など、よほど特殊な体験でない限り覚えていないものだ。それでいい。なぜなら子どもは、一心に行く先をみて生きていかなければならない存在なのだから。

長い年月をふり返れば、子どもとの暮らしは、いつも忙しくおもしろかった。毎日のように、小さくしかし確かな印象をのこすできごとが刻まれている。もつともそれはいくぶん美化された思い出であることも承知しているけれど。いつかどこかで「子どもからはいいダシが出る」と書いていた人があって、うまい！と私は同感したのだったが、そのダシは数十年も私のなかで効いていて、自分の感じ考える世界を味わい深くしている。犬も歩けば棒に当たるが、人も子どもと歩けば新しい世界に出会うのだ。

### 人生をくりかえす楽しみ

(中略)

### なじむことの力

#### ある秋の日に

陽のあたる庭先、葉の落ちたけやきの木の下で、半ズボン姿の小さな子どもが、さつきからずっと、上を見上げて立っている。枝の上には、ぬれねずみ色の象のぬいぐるみが干してあるのだ。名前は「どんどん」である。

寝ても覚めても、息子のいるところに「どんどん」がいる。左手で抱いて親指を吸っている姿は、おなじみのものだ。

「どんどん」がみじめな様子に汚れ、いささかの臭気を発するようになると、わたしは彼の抵抗を振り切って、ウール用の洗剤で押し洗いをする。汚れた水に少々たじろぎながら、かるく脱水をしてタオルで拭き、けやきの枝にしっかりと置けるようにして干す。そのあいだ、どんどんを取り上げられた息子は、「ヤダなあ、洗うとにおいがちがうくなっちゃうんだもん」などと文句を言いながら、うろろとわたしにつきまといつつあるが、けやきのいつもの枝に干されたとみるや、その下で乾くのを待ちはじめ

るのだ。小さな足踏みをまじえて、枝のかなたに分身を眺め、辛抱よく待ちつづける。風が枝のあいだを吹きとおり、「どんだん」を洗った洗剤の香りをはこぶ。やがて待ちきれずに生がわきの友達を取りおろしてもらった子は、「どんだんてきー、眼がかわいいんだよねー」など、ちよつと照れくさそうに言ったりしながら、すこしだけふんわりした「どんだん」をにんまりと抱いて、走っていく。

### 「お気に入り」の登場

この光景は、もう三十年も前のこと、いまは三十代となった息子が幼かったころのひとこまだ。若い母親だったわたしは、きつと家のなかで雑用をしながら、ときどき子どもの様子を楽しんで眺めていたのだろう。いまでもこの場面がくつきりと目に浮かぶ。

小さな子どもはそれぞれに、自分のよりどころを持っている。ぬいぐるみやガーゼやタオル。それはきつと、子どもの暮らしのだいじな足場なのだ。なぜそれなのか、という問いは無意味だ。本人は、ただ「はまる」のである。

兄息子も、「ボクのシュルシュル」と称する毛布のへりのサテンをさわって眠った時期があった。それは生まれたときに祖母から贈られた、クリーム色の赤ちゃん毛布だった。

しかし「お気に入り」へのはまり具合が並ではなかったのが、弟だ。

最初から「どんだん」だったのではなかった。まずは粗末な材質の毛布であった。ようやく歩く歩きはじめたころ、青い格子模様のそれを、引きずるようになった。「ドアの向こうを坊主が通る、坊主のあとから毛布が通る」と、わたしたちはよく笑っていたものだ。

### 子どもの決意

やがて夫の職場が変わり、わたしたち一家はドイツに引越すことになった。まさか、大きな毛布をかかえて飛行機に乗るわけにはいかない。さりとて息子にとっては「毛布命」である。というわけで、それはハンドタオルの大きさに缺で切られ、子ども用のミニバスケットに収められた。兄はお気に入りのミニカーをいくつか、弟はそのぼろ布を、それぞれの小さなバスケットにしまって、飛行機に乗ったのだった。

ドイツでの生活が始まって、息子と毛布の切れはしとの仲は、深いままだった。その町で知り合った日本人のおばさんに「Kちゃんのメーフ」とよく笑われた。毛布を持って指しやぶりをする自分に照れてか、せめて言葉だけでもツツパろうと、「おれのメーフ」と息子が言っていたからである。「毛布」をべらんめえ調で言ったつもりらしい。

しかし、ドイツの子どもたちに「おまえのそれ、何？ 買ったねえの」という具合に言われたのかどうかは知らないが、ある日彼は、「メーフ」と別れる決心をしたらしかった。それは、四歳の誕生日がきっかけである。「ぼくねえ、こんど四つになるから、メーフやめるんだ」というようなことを言った気もするが、わたしはうっかり忘れていた。あしたが四歳の誕生日という前の晩、おやすみなさいと例の毛布の切れはしを持ってベッドに行くはずが、机の上に置いてある。おや、と思う間もなく、一度閉められたドアがまたそーっと、ほんのすこしひらいた。見ると、ドアの隙間から真剣なまると目が片方、じーっと毛布をみつめている。じつにまじめな目だ。やがてドアはまた、そつととじられて、小さな足音が消えた。

翌日から息子は、きつぱりと毛布と決別した。それは洗われ、戸棚の奥にしまわれて、四歳になった誇りをした。「小さな子どものプライドつても、たいしたものだね」と、夫とわたしは、夜お茶を飲みながら話したものだ。

### ぬいぐるみを道連れに

ところが、それから間もなく「どんどん」が出現した。知り合いのドイツ人のおばさ

んが、兄弟ふたりに手づくりのぬいぐるみを贈ってくれたのだ。ライオンと象。それぞれに愛嬌があるうえに、手仕事の柔らかさとあたたかさにみちっていた。

兄のライオンへの愛情もさることながら、弟はその子象に、いっぺんにはまった。それはすぐに「どんどん」と名づけられ、すでに決別した毛布への積もる想いを浴びるかのように、溺愛された。「どんどん」は彼にとつては日本名だったらしく、上の階に住むカウンツおばさんのところへそれを抱いて遊びに行くときには、「ぼくのベンヤミン」と呼び分けていたから、ドイツ名も持っていたらしい。

日本へ帰ったとき弟は五歳だったが、彼の「どんどん熱」はますます昂じ、深い仲となっていた。家の近くの小さな公園で野球のまねごとをしていたかと思うと、玄関からかけこんできて四畳半の子ども部屋にころがっている「どんどん」を大急ぎで抱き、ちよつと指しゃぶりをしてまた放り出し、仲間の待つ公園へ走っていく。たまたまそれを見かけたわたしは、台所で笑いをこらえていた。

冬になり、「どんどん」が寒いと思う、というので、ウールチェックの残り布でチョッキをつくり着せたのが、何歳のときだったろうか。やがて彼が自転車乗りで熱中しはじめたころ、子ども部屋の畳の上に「どんどん」が置き去りにされて、ひとりころがって

いるのをよく見かけた。ようやく「どんどん離れ」が訪れたのだ。そんなわけで、きれいに洗われたぼろぼろの「どんどん」は、戸棚にしまわれることになった。

いまでも、戸棚の奥に黒いつぶらな目をしてすわっている「どんどん」を、片づけものの折りに見かけると、秋の陽ざしを浴びて「どんどん待ち」をしていた半ズボン姿の子どもの光景が、一気によみがえる。

なじみの世界に支えられ

(略)